

# 柿生文化

柿生郷土史料館 情報・研究誌

住所:川崎市麻生区上麻生 6-40-1

柿生中学校内

電話:070-1503-6401/044-988-0004

http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo

第146号

多摩丘陵に残る  
義経の面影 - 12

## 寿福寺に残る鎧と大般若経 (その3)

麻生歴史観光ガイドの会名誉会長 松本良樹

さて 義経暗殺団の、土佐坊昌俊とはどんな人なのか振り返って見たいと思います。

平治元年(1159)平治の乱で平清盛に敗れた源義朝は、坂東で再起を図るべく落ち延びる途中尾張の野間にたどり着き、股肱の臣鎌田正清の舅で年来の家臣であった長田忠致、景致親子のもとに身を寄せました。入浴し金王丸に背中を磨らせ、浴衣をくれと声をかけたが返事がなく、金王丸に浴衣を取りに行かせたすきに、恩賞目当ての長田父子に裏切られ、槍で義朝は殺害されました。享年38歳。正清も酒を吞まされ殺害されました。

金王丸は危機を切り抜けて脱出し、常磐御前に義朝が逝去したことを報告し仏門に入り、土佐坊昌俊となりました。その後、金王丸が表舞台に登場するのは25年後の義経の暗殺を計画した頼朝が、その人選をした時、誰も名乗るものがなく、仕方なくその人として名乗ったものが土佐坊昌俊でした。彼の父は渋谷重国というのが一般的ですが、渋谷重家の子とも言われ、はっきりしたことは良く分かりません。(諸説あり)

現在、東京の渋谷に金王八幡宮という神社がありますが、この神社は後三年の役で功を立てた秩父平氏の河崎基家によって寛治6年(1092)に創建されたといわれています。

秩父重綱の弟 河崎基家が武蔵国橘樹郡川崎に住んで(現在の川崎区稲毛神社周辺)河崎冠者と称しました。基家とその子重家は、武蔵国豊島郡谷盛荘や相模国高座郡渋谷庄を得て勢力を拡大し、重家の子 重国の代には相模国の渋谷荘へ移って渋谷氏を名乗りました。

この渋谷重国の代には現在の神奈川県綾瀬市に城山城を築き、本拠地として発展しました。本シリーズ『長尾の妙楽寺と義経』(第137、139号)でもご紹介した、近江源氏 佐々木秀義を匿い20年に渡って面倒を見た武将として有名です。重国の子が金王丸で、綾瀬市にある長泉寺は、渋谷氏の菩提寺で金王丸のお墓もあります。

この金王八幡の御由緒によれば、金王丸は渋谷重家が当八幡宮に授児祈願を続ける中、八幡神の霊夢(啓示)により永治 1(1141)8月15日に誕生しました。金王丸17歳の時、源義朝に従い保元の乱に出陣。平治の乱ののち出家し、土佐坊昌俊と称し義朝の御霊を弔いました。また、頼朝とも親交が深く鎌倉幕府開幕にも尽力。



御影堂の金王丸像(木造)

義経追討の命を受け、文治 1(1185)10月23日夜、心ならずも義経の館に討ち入り、勇ましい最期を遂げました。頼朝は、金王丸の忠節を偲び、鎌倉の館よりこの地に櫻木を移植し『金王櫻』と名付けました。この櫻は一枝に一重と八重の花が混ざって咲く珍しいもので、天然記念物に指定されています。

金王丸御影堂には、保元の乱出陣の折、自分の姿を自分で彫刻し母に遺した木造が納められ、更に金王丸が所持した『毒蛇長太刀』も秘宝として保存されています。

また渋谷重国の孫 光重は 1247 年の宝治合戦で、北条側に付き三浦氏を滅ぼした恩賞として北薩摩を領しました。

光重の次男実重には東郷を与えましたが、この子孫から明治になって東郷平八郎が出生。日露戦争で参謀 秋山真之と共にロシアのバルチック艦隊を爆破する日本海海戦に勝利した司令長官です。綾瀬市にある早川城址公園の物見塚には現在『東郷氏祖先発祥地碑』の大きな石碑が立っていますが昭和7年に、ご子孫の方が建立されたものです。



敗走する義朝と渋谷金王丸常光

鶴見川流域の中世  
その6

## 中世人の生活の舞台としての鶴見川 (6)

## ◆「鶴見寺尾絵図」2◆

中西望介(戦国史研究会会員・都筑橋樹研究会会員)

鶴見郷については「鶴見寺尾絵図」の他に数点の史料が残されている。鶴見が史料に現れるのは、元久2年(1205)に畠山重忠が討取られた二俣川合戦に参陣した安達景盛の従者に加世次郎・鶴見平次等が見える『吾妻鏡』が初見である。この鶴見平次は武蔵国鶴見郷の武士と考えられる。また、加世次郎が安達氏の被官であることは安達氏所縁の甘縄から出土した「今小路西遺跡出土の墨書木札」に三番「か瀬口」あるいは「かせ口入道」とあることから明らかである。加世氏は賀勢・加勢・加瀬などの名字が宛てられる鶴見郷の対岸にある加世庄(川崎市幸区北加瀬・南加瀬)を名字の地とする武士である。「今小路西遺跡出土の墨書木札」にはこの他に鶴見区潮田を本貫地とする潮田三郎の記載もあることから、鶴見川下流域に安達氏とその従者(被官)の所領が集中している事に注目したい。鎌倉街道下が通る鶴見は鎌倉の防衛にとって重要な拠点であった事から安達氏を配置したのであろう。

安達氏は源頼朝の流人時代からの側近で、幕府草創の功臣として幕府の中枢に関与してきた。仁治2年(1241)鎌倉幕府は武蔵野の開発を計画するが、犯土のために將軍頼経の方違えの本所として安達義景の別荘鶴見郷に選んでいる。弘安8年(1285)に起こった霜月騒動では安達泰盛以下一門や縁者が多く討たれている。すると先に見た「鶴見寺尾絵図」の領主達の中には、霜月騒動によって安達氏の鶴見郷が没収されて、その跡に入部した人々も含まれているであろう。寺尾郷地頭阿波國守護小笠原蔵人入道長義はその可能性がある。

この他に多摩川・鶴見川流域における安達氏の痕跡を追うと『尊卑分脈』に記された安達盛経の娘稻毛禅尼があげられる。この女性は稻毛庄に所縁があって稻毛禅尼を称したのであろう。

元弘3年(1333)5月8日に新田義貞が上野国に挙兵すると、金沢(北条)貞将は5万騎の軍勢を率いて新田義貞軍の背後を突くために下河辺庄(旧利根川の流域で埼玉県春日部市・幸手町、茨城県古河市・猿島郡等)に向かう途中、鶴見河原で小山秀朝・千葉貞胤の軍に遭遇し敗れて鎌倉に敗走した。

鎌倉幕府滅亡後、全国で後醍醐天皇が親政する建武政権への不満を持つ勢力の蜂起が相次いだ。その中で建武2年(1335)には北条高時の遺児時行が諏訪頼重に擁せられて信濃に挙兵し、井出沢(東京都町田市)の合戦で足利直義軍を破り7月25日には鎌倉を占領しているが、これを中先代の乱という。その前日の7月24日、常陸国(茨城県)の佐竹氏は北条時行軍の一派と鶴見辺で合戦している。この2度目の鶴見合戦では佐竹貞義の子息義直や一族の稲木義武・真崎義景が討ち死にしている(足利尊氏御教書案写)。また、建武4年2月16日の塙右京大夫宛ての足利尊氏御教書写でも「鶴見原合戦致忠節之條 尤以神妙 向後彌可抽戦功之状如件」とあり鶴見河原での合戦が記されている。

足利尊氏・同直義兄弟が対立して室町幕府が分裂した観応の擾乱が起きると、その間隙を縫って南朝方の新田義興(義貞の子息)が上野国(群馬県)に挙兵して関戸に迫った。正平7年(1352)これに合流するために水野致秋は鶴見宿地から関戸へ馳せ参じている。

このように鎌倉幕府滅亡の合戦から観応の擾乱にかけて鶴見では度々合戦が行われた。鶴見は鎌倉街道下道が通り鶴見宿・鶴見市場がある交通の要衝だったからである。

応安4年(1371)武蔵守護代大石能重は建長寺正統庵領鶴見郷新市での押買以下の濫妨狼藉を禁じる禁制を出している。応安4年当時は鶴見郷が建長寺の塔頭正統庵領であることがわかる。押買とは、買い手の側が強引に安値で商品を買取ることをいう。市場や宿では人や物や情報が交差する場所であるとともに喧嘩・口論や押買などが横行する喧噪の巷であった。合戦は人や物や情報が交差する場所で行われている。無人の荒野で行われたわけではない。「鶴見寺尾絵図」には鎌倉街道下道沿い、また鶴見川に架かる橋詰に集落が描かれており、とくに橋詰の集落が当時の鶴見宿と推定される。

次回は武士団を取り上げる。

(つづく)



図 安達泰盛(蒙古襲来絵詞)

シリーズ  
教育の歩み 第3部

## 日本の学校と教育(2)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

## ◆藩校と寺子屋◆

明治5(1872)年の学制の公布後、政府は各地における初等学校(後の小学校)の設置を急がせました。その結果、全国各地での初等学校の開設は、驚くほどのスピードで進みました。詳しくは、第1表をご覧くださいのですが、学制公布の翌年、明治6年には、早くも12,000校を超え、それから2年後の明治8年には24,303校と現在の学校数と大差ない初等学校が開設されていたのです。ただし、学齢年齢の子ども達の就学率は、まだ35%程度(男児50.8%、女児18.7%、平均35.4%)に留まっていたのですが…。就学率に問題があるとはいえ、僅か3年という短期間に、これだけの学校を開設し、先生を確保することがなぜ出来たのでしょうか。

表1 初等学校の普及と就学状況

表2 児童の男女別就学率

年次(明治)	学校数(校)	教員数(人)	就学児童数(人)	男児(%)	女児(%)	男女平均(%)
6	12,558	25,531	1,145,802	39.9	15.1	28.1
7	20,017	36,866	1,714,768	46.2	17.2	32.3
8	24,303	44,664	1,928,152	50.8	18.7	35.4
9	24,947	52,262	2,067,801	54.2	21.0	38.3
10	25,459	59,825	2,162,962	56.0	22.5	39.9
11	26,584	65,612	2,273,224	57.6	23.5	41.3
12	28,025	71,046	2,315,070	58.2	22.6	41.2

出典:文部省編『学制百年史』(昭和56年版)

この点で、明治国家の誕生以前、徳川幕藩体制時代における教育の進展を振り返る

必要があります。当時の支配階級である士族層を主な対象とした、行政官(官僚)を養成するための藩校と、庶民を対象とした教育機関である寺子屋です。幕藩体制下の藩の総数は、幕末段階で276でした。そのうち資料が欠けていて藩校の存否が分からない21藩、藩校建設年代が不明の4藩、明治維新後に重い腰をあげて藩校を開いた36藩を除く、215藩が幕末段階で藩校を開いていたのです。この215校の内全体の89%に相当する187校が、宝暦年間(1751年以降)～幕末までの幕藩体制後期に開校されています。いわば、藩財政が厳しさを増し、諸藩が生き残りを策して、いかに国を富ませるかに本格的に力を入れ始めた時期に一致しています。

藩校は、藩行政の担い手を養成する学校でしたから、基本的に藩士の子弟の教育に特化していました。そのため、武士の子弟は、その全員が入学を強制されるケースが大半でした。その上、卒業までに修得すべき学習内容もきちんと定められ、卒業できない子弟には、家禄(家の維持のための俸禄)は付与されるものの、親の役職を継ぐことは認められず、役職に伴う上乘せの禄は没収される厳しい決まりを定めた藩もあったのです。また江戸時代後期になると、次第に苦しくなる藩財政を考慮して、経済改革の担い手を養成することをめざして、向学心の厚い平民の入学を許可する藩校が多くなります。この傾向は、明治維新経過後も新制度で藩校が廃止されるまで、一貫して増加を続けました。なかには、岡山藩の藩校のように、17世紀後半(江戸時代前期)の開学以来、一貫して下士や富農(庄屋など)の子弟の入学を認めていたケースもありました。開校時に定めた『掟』には、「藩士の子弟は8歳から20歳まで、希望によって入学を許可する。庶民の子どもは、才があり品行正しければ、これまた入学を認める。教場の座席は、身分より長幼の順に拠るようにせよ。」とありますから、藩主の姿勢によるところが大きかったのでしょうか。

藩校は、支配階級である士族の子弟を主たる対象とした、中等並びに高等教育機関として位置づけられます。初等教育にあたる読み書きの部分は、家長の計らいで身に着けるのが常でした。これに対し、庶民の子女はどうだったのでしょうか。日本の庶民(町人や農民など)の識字能力の高さは、江戸時代を通じて日本との貿易関係を維持した中国、朝鮮そしてオランダを介して、広く世界にも伝えられていました。町人たち(商人や手工業職人など)はもちろん、農民たちも商品作物の生産と販売を通じて、読み書き能力と初歩的な計算能力の修得の必要を感じ、子どもたちを学びの場に送り出しました。ご存知の寺子屋です。寺子屋という言葉は、元禄の頃に大阪で生まれたと言われますが、庶民の子女の学びの場は、手習所と呼ばれて戦国時代後期には誕生していました。この点について、『日本教育史資料』は元亀年間(1570～72年)創立の手習所について記しています。大阪で寺子屋という呼称が生まれた元禄年間(17世紀末～18世紀初頭)には、江戸や京・大阪といった大都市ばかりでなく、地方城下町やその近在にも手習所が誕生するようになります。山形県鶴岡の市立図書館には、この地域のある手習所が元禄16(1703)年に定めた『掟』が保存されています。そこには、「早朝から手習所に詰めて、学習に励まねばならない。命ぜられたところを残さずに反復練習し、読めなかつたり間違つたりしたところがあれば、仲間同士で教えあい、それでも分からない箇所があれば、師に教えを仰ぎなさい」などと記されています。(続く)

**地元出土の  
土器寄贈**

掲載の写真は、故森潤一先生のご遺族よりご寄贈いただいた、古墳時代後期から奈良・平安時代前期(7世紀後半～11世紀後半頃)に数多く使用された土師器の一部です。

土師器は通常、800℃程度で、焼成されるため、赤褐色の色合いを帯びます。

発掘場所は、上麻生4丁目と王禅寺西4丁目の交差する地域にあった森家の地所と伝えられています。森潤一先生お一人で、発掘修復して、保存されていた貴重な品々を、ご寄贈いただきました。大切に保管、展示してまいります。

**柿生郷土史料館催物案内 【参加自由、入場無料】**

◎開館日:奇数月は毎日曜日、偶数月は毎土曜日 (原則として月4回)

**7月** 5・19・26日(毎日曜日) **8月** 1・8・22・29日(毎土曜日)

◎開館時間:午前10時～午後3時 (7月12日、8月15日は休館です)

**第18回 特別企画展****続 戦中・戦後の教科書展**

柿生中学校の創立70周年記念事業に、協賛する形で開催した、戦中・戦後の教科書展は、幸い好評のうちに終了となりましたが、皆さまから、再度実施してほしいとの声もあり、2017年10月以降に、新たに見つかった戦前・戦中の教科書も相当数に上ることから、新発見の教科書も加えた形で、ここに改めて、「続 戦中・戦後の教科書展」として、再度教科書の特別展を開くこととしました。現在の教科書との違いを、しっかりご覧ください。

**期間** 6月27日(土) ～ 9月27日(日)

**会場** 柿生郷土史料館特別展示室

**お知らせ**

毎年ご好評を頂いておりました小・中学生を対象としたサマースクールですが、新型コロナウイルス拡散に鑑み、今夏は中止させていただくこととなりました。ご迷惑をおかけしますが、ご了解ください。